

「日々の理科」(第 2245 号) 2020, -9, -3

## 「月見草の開花(1)」

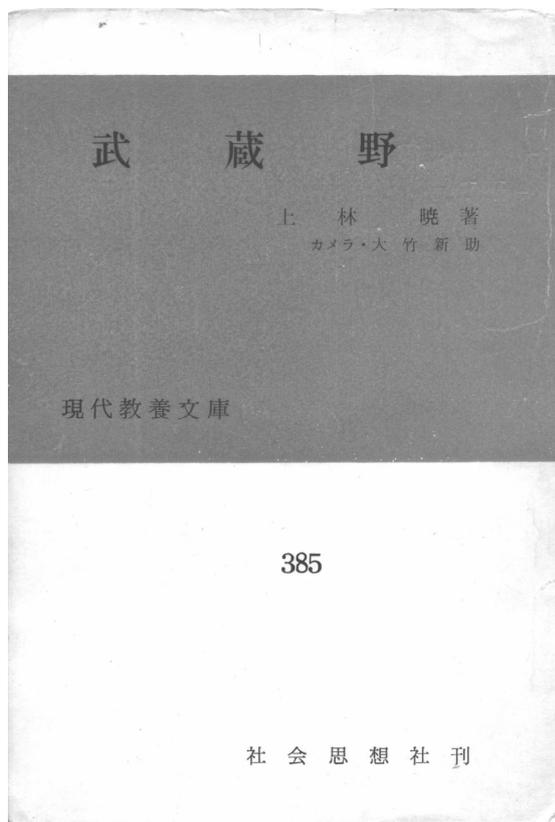
お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

上林 暁(かんばやしあかつき)という名をご存知だろうか。戦前～戦後にかけての、短編の私小説を中心にした作家なのだが、あまり知られていないと思う。作品の舞台が武蔵野(都内西部・多摩地区・埼玉南部)が多いこともあり、私が好きな作家の一人だ。代表作は「聖ヨハネ病院にて」「貧窮問答」「寒別れ」などがある。「聖ヨハネ病院」というのは、小金井市にある「聖ヨハネ会桜町病院」のことで、そこで療養していた上林の妻との日々を綴った作品だ。私は桜町病院のとなりにあった病院で誕生した。

私は「上林 暁全集」も持っているが、よく愛読しているのは、上記の作品などの小品を収めた「武蔵野」というタイトルの文庫版の一冊だ。



この本には上林の小説の舞台になった風景を、大竹新助の写真も多数掲載されている。大竹は武蔵野を中心にした風景写真家で、自身も保育社などから出版している。昭和30年代の写真が多く、懐かしさも感じる。残念ながら現在は絶版で、入手が困難である。

上林の作品の中でも私が一番好きなのが「花の精」という短編だ。庭で大切に育てていた月見草を、庭師が刈ってしまい、もういちど是政(府中市)の多摩川原に採りにいくという、小説というよりは「日記帳」のような内容だ。その中に、月見草が開花する一瞬の描写がある。その一節を引用してみよう。

「それは、小さな苗の時分、子供が近所からもらってきたものであったが、私も月見草ということを知らないから、植えもせず、ほったらかしてあった。根も茎もほとんど干からびた時分になって、これ、夕方になると黄色い花が咲く草だって、と子供が言うものだから、そんなら月見草だろうと言って、植えてやると、もう枯れたのかと思っていた葉はたちまち生気を吹きかえし、ぐんぐん茎が伸び、はたして月見草の花を開いた。六月のおわりの、糠のような梅雨の降る晩であったが、薄羽の蝶が翅を開くように、黄色い花がポツリと咲いたのである。柔らかくて、薄くて、清らかで、咲いているのも危いような風情であったが、その薄い花卉に雨の霧が小さな粒になってかかっていた。

その後二カ月ばかりの間、二本の月見草は、倦むことを知らず毎晩咲きつづけた。一番多く咲いた晩は、一本に十二だった。夕方花が開く頃になると、私は薔に顔を近づけて眺めていた。見る見る薔がふくらんで、やがて薔を包んでいた罅がはねかえり、花卉の一つが弾け、瞬間に完全に開花するのであった。その時くらい、植物の生長力を肉眼で見たような気持になることはなかった。葉も茎も薔も、一秒も休むことなく、一様のかと速さで成長しているはずなのに、それは肉眼で見ることができない。ただ花を開く時だけ、肉眼に映るのを私は面白く思った。

こんなこともあった。ある晩、一つの薔の色が他の薔と少しちがうようだと思ったので、そばに寄ってみると、小さな小指ほどの薔に、バットの吸い口がすっぽりとかぶせてあるのであった。昼間、客の残して行った吸い口を、男の子がかぶせたのだ。薔は締めつけられて、花を開くことができないでいた。吸い口を取りのけてやると、月見草はすぐ花を開いた」

私はこの一節に目がとまった。上林の文体は実に平易で読みやすく、小説とは思えないのだが、氏の月見草の観察の仕方が興味深いのだ。この作品に出てくる植物は「黄色い花」という記述から、恐らく「マツヨイグサ」の一種だろう。本当にそんなに一瞬で開花するのだろうか？私は自分で確かめてみたいと思った。